

# 古プロシア語訳「ルター小教理問答書」翻訳源再探 1 : 添付ドイツ語テキストと翻訳との関係

著者	井上 幸和
雑誌名	神戸外大論叢
巻	57
号	1
ページ	125-138
発行年	2006-06-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000875/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000875/</a>



# 古プロシア語訳「ルター小教理問答書」 翻訳源再探 1.

—— 添付ドイツ語テキストと翻訳との関係 ——

井 上 幸 和

## はじめに

16世紀のバルト諸語に翻訳された M. ルターの「小教理問答書（以下、カテキズム）」のうち、古プロシア語訳（1561年刊，A. Will 訳）と（古）リトアニア語訳（1579年刊，B. Vilentas 訳）の翻訳源に関しては，R. Trautmann の綿密な研究がある。<sup>1</sup> この研究，すでに1世紀近く以前のものであるが，管見の限りでは，現在に至るもこれを発展させた研究は見あたらない。加えて，Trautmann が行った実証的なその分析と帰結は，現在も十分に傾聴に値するものである。とりわけ方法論的にこれを援用して，今一つのバルト語訳であるところの，（古）ラトヴィア語訳カテキズム（1586年刊）の翻訳源を探る試みは，Trautmann の研究を直接的に継承する上で，是非とも取りかからねばならない課題である。

しかしながら，Trautmann の研究自体は，言及されるテキスト資料の妥当性，およびその範囲に関して，現在の視点からするとやはり前時代的であり，また逆に現時点で実態を追試するには資料面でのアクセスが困難であることから，その方法論を尊重するにしても，テキスト資料の参照に際してはいま一度総ざらいして後に，再度，Trautmann の帰結を再検討することが

<sup>1</sup> R. Trautmann, Die Quellen der drei altpreussischen Katechismen und des Enchiridions von Bartholomaeus Willent. I(S.217-231), II(S.465-479). *Altpreußische Monatsschrift*, Band 46. Königsberg 1909.

適切である。しかるのちに、ようやくラトヴィア語訳をも含めたバルト諸語訳カテキズムの翻訳源問題が、総括的に捉えられることになる。

以下では、Trautmannの研究を概観し、それを起点とする議論の展開の可能性を探る。その際、まず第一に、バルト諸語訳のうち、とくに古プロシア語訳が抱える翻訳源問題の特殊性を取り上げ、これを中心に再考する。Trautmann自身が論文後半で行っているリトアニア語訳の翻訳源の解明、さらには、今後の課題であるラトヴィア語訳のそれに先だって、事前に解消しておくべき古プロシア語訳に固有の問題がこれである。副題に沿って言い換えれば、古プロシア語訳が本来の翻訳源問題に付随する問題として、あるいはそれとは別個の独立した問題として、伝えられるテキストの印刷形態から発生する問題が、添付ドイツ語テキストと古プロシア語訳テキストとの間の「奇妙な」関係である<sup>2</sup>。Trautmann自身も、この関係に関わる個所の解釈には難渋を示しているところである。抜本的な問題解決には、分析方法自体の再考も求められてしかるべきであり、この意図も兼ねて、Trautmannの研究に立ち入って検討を加える次第である。

## 1. Trautmann, 1909の概要、分析手順と結論

まず、Trautmann, 1909 (AM 46, pp. 217-231, 465-479) の概要を示しておく<sup>3</sup>。この論文は、前後に二分されて離れたページ付けで掲載されているが、内容上は、古プロシア語訳の翻訳源問題に関わる部分 (217-231, およ

2 このことに関連して筆者は以前に、“К вопросу о языке перевода прусского Энхиридиона” *Colloquium pruthenicum secundum*, Kraków 1998. において問題提起とひとつの解釈を提出した。

3 Trautmann, 1909では、分析に先立って先行研究を簡潔に辿って処理している。今、それらを再試する余裕はないので、言及される先行研究のリストのみを挙げておく。

A. Bezzenberger, Studien über die Sprache des preußischen Enchiridion, KZ 41.1907.; E. Bernecker, *Die preußische Sprache*. Straßburg 1896.; F. Bechtel, B. Willent's litauische Uebersetzung des Luther'schen Enchiridions und der Episteln und Evangelien. *Litauische und Lettische Drucke des 16. Jahrhunderts*, III. Heft. Hrsg. von A. Bezzenberger. Göttingen 1882., idem, Zum altpreußischen Enchiridion, *Altpreußische Monatsschrift*, Band 18.

び465-471)と、リトアニア語訳の翻訳源問題に関わる部分(465-479)に分けることができ、前者の問題により多くの紙数が費やされている。紙数のアンバランスの理由は明白で、ここに、古プロシア語訳テキストの印刷形態の特殊性が関わっている。現在に伝わるテキストの印刷形態は、次のようである。じつは、Trautmann 自身がこの論文を公表した翌年(1910年<sup>4</sup>)に、古プロシア語訳のカテキズムを含む全言語資料の校訂テキスト、文法記述並びに詳細な語彙索引を併せて浩瀚な著作 *Die altpreußischen Sprachdenkmäler* を出版しており、これはその後長年にわたって古プロシア語テキストの底本となったものであるが、そこにおいても明らかに見て取れるように、古プロシア語訳は、ドイツ語原文テキスト(これを、Trautmann は、Tと略す。以下、これに従う)との見開き対訳の体裁を取っている。後年出版された Mažiulis によるオリジナルのファクシミリ版<sup>5</sup>を見ても、同様である。すでにオリジナルにおいてそうであったこの対訳形式の中に、大きい疑問が潜んでいる。以下、常識に基づく推測と、それに反するとしか考えようのない事実との間の矛盾として、この「見開き対訳形式」の謎を考えておく。

通常、また、その目的に照らしても、例えば現代的意味での対訳本(講読教材用テキストや、古典の翻訳付きテキストが容易にイメージされる)は、おおむね見開きの左ページが原文、右ページが翻訳になっており、印刷技術的に可能な限り、原文と翻訳が見開きの枠内で互いに参照できるように組まれている。しかし、やむを得ず同一見開きページ内に収まらない場合があることも、しばしば見かけるところである。なぜこのような印刷技術上の問題に関わることまで述べるか、その理由は、今に伝わる古プロシア語訳の印刷形態の特殊性を指摘すれば、容易に理解できよう。古プロシア語訳カテキズムもまた、左ページにTを宛って右ページに翻訳部分が印刷され、明らかに

4 同論文, p.219, note 2) には, Verf., *Die altpreußischen Sprachdenkmäler*.... 1. Teil: Texte. Göttingen, 1909. とある。前年に第1分冊(テキスト)が出版されたかのようにであるが、実態は不明。

5 *Prūsų kalbos paminklai* (1, parengė V. Mažiulis), Vilnius 1966.

現代的な意味での対訳本の体裁をとっている。そして、いわゆる対訳本の機能を或る意味では現代以上に追求するかのように、左右のテキストの対応は、空間的にも、すなわち両ページにおける対応箇所（基本的に、段落単位）の配置においても、かなりの精度で一致している。この一致を実現するために植字工は、行数、行間隔を調整すると共に、場合によっては活字の大きさをも調整している。その目的を推測すれば、きわめて常識的には、Tに対する古プロシア語訳、またその逆が、より容易に参照し得る、そのための植字工の技術的苦心の現れであると言えよう。見開き体裁の外見からは、この推測を否定するような証拠は何も見あたらないし、また、否定することに何らの利点もない。

ところが、この推測を真っ向から拒絶する事実が、対訳テキスト間の内容に存在している。すなわち、左ページのドイツ語原文（T）と右ページの古プロシア語訳の間の不一致が、単に翻訳の不備やミス、不正確な翻訳とか意識の域を越えて、明らかにTを無視した、あるいはTに反した、しかし「翻訳」がなされている。この事実を示すと考えられる数カ所については、すでに Trautmann も同論文の中で指摘するところである。そして、Trautmann はもっぱら、Tが基づくカテキズムの版本と古プロシア語訳が基づく翻訳源の版本の探求に努めているわけであるが、同様の調査に基づいて、ここでの問題、すなわち、T（添付ドイツ語テキスト）と翻訳テキストとの関係に再び焦点をあてることができる。この観点から、該当する箇所を Trautmann の分析から抽出して検討する作業を、次節において行うこととする。

次に Trautmann の作業手順と結論を辿る。Trautmann は、まず、古プロシア語訳の検討に先立って、Tのテキストの比定を行う。すなわち、Tが既存のカテキズムの何れの版に基づくものであるのか、を検討している。すでにこの手順からして、Tと古プロシア語訳とが典拠を異にすることを大前提としていることが見て取れる。Tのテキスト比定を結論付けてのちに Trautmann は、改めて、古プロシア語訳の翻訳源の比定に取りかかる。

Tおよび古プロシア語訳が依拠するルター・小カテキズムの版を調査するに際して、Trautmann はまず、Wittenberg 最終版（1543年刊）とLeipzig 版（L. 1547）をベースにして<sup>6</sup>、これらを含むすべてのテキストもしくは少なくともこれらに一致するケースを除いて、Tについて、そして古プロシア語訳について、それぞれ異同個所を細部にわたって検討した。検討の結果、項目数はそれぞれ、Tについては79個所（項目）、古プロシア語訳については81箇所（項目）に及ぶ<sup>7</sup>。

以上、2段階の比定の結果から、Trautmann はそれぞれ別個に、次のように結論付けている。

#### ＜T. の典拠に関するTrautmannの結論＞〔訳〕<sup>8</sup>

プロシア語エンキリディオン〔カテキズム〕のドイツ語テキスト〔T〕は、その根底に、（W.1542ではなく）L.1543を持つ。このことは至る所で明らかである。（pp. 224, 226, 227, 228, 229）<sup>9</sup>。Nürnberger Kinderpredigten〔NKP〕の影響がきわめて強い。（pp. 224, 225, 226）。聖書が2個所で利用されている。（pp. 227, 230）

2個所において、Tは明瞭にL.1543と異なり、Wittenberger Druck、しかも、W.1540を優先させる。（pp. 227, 228）（ここで注意すべきは、完全な形で入手できる版本が、Herzog Albrecht の図書館が蔵するものであるということである。）

1個所においてW.1529-1542に一致（p. 227）、2個所においてW.1529-1540に一致（pp. 228, 230）、2個所においてW.1531-1542に一致（pp. 227f.）、1個所においてW.1540, 1542に一致（p. 228）する。これらの個所においては、

6 この2種のテキストをベースとすることの是非については、後の問題とする。

7 筆者はこれらに通し番号を付した。その際、添付ドイツ語テキストの項目には通し番号にTを付し、古プロシア語訳のそれにはPrを付して、参照の便宜を図っている。

8 Cf., Trautmann, 1909, pp. 230-31.

9 Trautmann は結論において該当箇所をページ数のみで指示している。より具体的にどの項目を指すのかは、後の分析において示すことにする。

W.1540が利用されたものと考ええる。

1 個所において、Magdeburger Katechismusが問題になる(p.228)。2 個所において、出所不明の変更と追加がある (pp. 226, 228)。これらはおそらく独自に行われたものである。

他のどのテキストにも確認されない変更が5 個所、認められる(pp.226, 227, 228, 229, 230)。

他に、追加 (225, 228)、省略 (225, 226, 227, 228, 229) が認められる(そのうちのいくつかは、植字工の責任の可能性がある)。

#### ＜古プロシア語訳の翻訳源に関する Trautmann の結論＞〔訳〕<sup>10</sup>

NKPにたいする A.ヴィルの態度はきわめて特徴的である。すなわち、一連の個所においては、ヴィルは、T.と同じく、NKPに従っている。しかしながら、T. がL.1543に従っているにも関わらず、ヴィルの方はNKPに従っている場合がある (s.465, 466さらに466?)。他方また、T. がNKPを優先させている個所で、ヴィルはL.1543に従っている (s.465,466)。s.466, 468, 469においてもヴィルはL.1543に従う。1 個所、W.1540が利用されている (s. 465)。また、1 個所、おそらく Große Katechismus が利用されている (s.466)。バイリンガルの Magdeburger Katechismus の影響が著しく認められる。しかも、s.468, 469, 470 (s.466も?) は、低地ドイツ語のテキスト、s.466, 468, 469はラテン語テキスト (すなわち、Lonicerusと呼ばれるラテン語訳版、cf. Knoke, s.23f.) が利用されている。

ところで、自明な逸脱から残っているもの (変更, s.466, 466f., 468-469, 470; 追加, s.466,467, 468, 469, 470; 省略, s.465, 466, 467, 468, 469, 470) —そのうちのいくつかは、その責任が植字工にあるケースもあり得る—は、もともとのヴィルの完全な責任として今日でも保持するには、あまりに少なすぎると思われる。

<sup>10</sup> Cf., Trautmann, 1909, p. 471.

以上のごとく、Trautmann の作業手順と結論を辿って、この節の最初に述べた「見開き対訳形式」の問題に立ち返ると、ここに新たな疑問が生じてくる。上記のように、Trautmann は、Tが依拠する版と古プロシア語訳の翻訳源に相当する版の比定を別個の作業として行い、したがって結論においても別個にそれぞれの典拠を推定した。それはそれで、2種類のテキストの典拠（ただし、古プロシア語訳に関しては、翻訳源）の調査結果として意味のあるものである。しかも、ベースとなる（標準的）テキストとの異同箇所も、79と81というように、偶然にしろほぼ同じ項目数になっていることから、Tと古プロシア語訳が同程度に（標準的）テキストから逸脱している、すなわち、同程度に異なる別個のテキストを典拠としているという結論は、かなり説得力のあるところである。今、本論ではこの点に反論するつもりはない。しかし、先にも述べたように、Tと古プロシア語訳とが外見上「見開き対訳」の体裁で印刷されている以上、両テキストの関係を問題にするためには、より積極的な判断を下すことが求められるのではないと思われる。ここでの問題の出発点であった、「見開き対訳形式」であるTと古プロシア語訳の間の不一致個所の存在を、Tが依拠する版と古プロシア語訳が依拠する版の相違として解釈するに留まらずに、更なる積極的な結論に導くべく、個別の議論の前提として、Trautmann の調査結果のうちここでの問題に関わると推測される箇所を取り出してリストを作成することとしたい。<sup>11</sup>

## 2. Trautmann の研究に基づくリストの作成

個々の項目の細部を全体として検討する重要性もさることながら、ここでの目的からすれば、古プロシア語訳においてあえてTではない他のテキスト版本を翻訳源とすると考えられる異同個所の指摘がとりわけ重要である。言い換えればそれは、Tが、ベースとなるテキストからも逸脱し、なおかつ古

11 ここで作成されるリストは、後に個々の項目を検討する際に、対象外として排除され得るものも含んでいる。



プロシア語訳の翻訳源にも一致しないような異同箇所である。Tも古プロシア語訳も明らかに、ベースとなるテキストからは同程度に逸脱している。しかし、Tと古プロシア語訳の関係、言い換えれば「不一致関係」は、単にベースとなるテキストからの等距離の逸脱のためだけでなく、両テキストのより積極的な不一致箇所に起因していると見る事が出来よう。そしてそれらは、おおむね次のような個所の中に含まれていると考えられる<sup>12</sup>。以下、該当項目ごとに Trautmann の記述と解説を引用・訳出しつつ、古プロシア語訳がほぼ決定的にTと背反する翻訳の実態を示すと思われる箇所を指摘して、Trautmann の分析結果からのここでの抽出リストとしたい。なお、参考文献は略号<sup>13</sup>で言及され、記述において当該箇所が依拠する版本については等号(=)、また反する版本については星印(\*)でもって示すことによって簡略化しておく。コメントはほぼ Trautmann によるところのものの翻訳である。

添付ドイツ語テキスト (T)	古プロシア語訳(Pr)
<p>1. T. No.2 22, 5f.: ich bin der Herr dein Gott, du solt nicht andere Götter neben mir haben =NKP * W.1529-1542, L.1543: du solt nicht ander Götter haben</p>	<p>Pr. No.2: 23, 6: tou niturri kittans deiwans pagar mien turritwei ヴィルはここでは、Tに従っているが、おそらく、W. 1529-1542, L. 1543 (du solt nicht ander Götter haben) に誘発されてich bin der Herr dein Gottは省略されている。</p>
<p>2. T. No. 4: 22, 11ff.: du solt den Namen des Herrn deines Gottes nicht vergeblich füren. Dann der Herr wirdt den nicht unschuldig halten, der seinen Namen vergeblich füret =NKP</p>	<p>Pr. No. 3; 23, 11f.: tou turri stan emnan tweisei deiwas ni enba'ndan westwei = W. 1529, 1531, 1540, 1542, L. 1543: du solt den Namen deines Gottes nicht unnützlich füren</p>

12 もちろん、Tあるいは古プロシア語訳のいずれか一方のみが、ベースとなるテキストから逸脱しているケースも無視できない。そういったケースについては後の検討において必要に応じて取り入れることにする。

13 本編末尾の文献一覧を参照。

<p>* W. 1540-1542, L. 1543: du solt den Namen deines Gottes nicht unnützlich füren</p>	
<p>3. T. No. 7: 22, 22: gedenck des Sabbaths das du jhn heyligest =NKP * W. 1529-1542, L. 1543: du solt den Feiertag heiligen</p>	<p>Pr. No. 5: 23, 22: tou turri stan lankinan deinan swintint = W. 1529-1542, L. 1543: du solt den feiertag heiligen</p>
<p>4. T. No. 8: 22, 26: gern hören und fleißig lernen =NKP * W. 1529-1542, L. 1543: gern hören und lernen</p>	<p>Pr. No. 6: 23, 27: mukinnimaiについては, Bezz., KZ. 41, 117n. 参照</p>
<p>5. T. No. 9: 24, 2ff.: du solt dein Vater und dein Mutter ehren, auff das du lange lebest im Land, das dir der Herr dein Gott geben wird =NKP * W. 1531-1539: du solt deinen Vater und deine Mutter ehren * W. 1540: du solt deinen Vater und Mutter ehren, auf das dirs wolgehe und lang lebest auff Erden * W. 1542, L. 1543: du solt deinen Vater und deine Mutter ehren, auff das dirs wolgehe und lange lebest auff Erden</p>	<p>Pr. No. 7: 25, 2f.: tou turri... giwassi nosemienは, W. 1540: du solt denen Vater... lebest auff Erdenに完全に一致する。これに対して, W. 1542, L. 1543では: deinen Vater und deine Mutter</p>
<p>6. T. No. 10: 24, 7: umb seinen Willen 他のすべての版に反して, これはNKPに基づく追加であり, NKPでは次のGebotにも同様に存在する。説明(Erklärung)全体もNKPに従っている: und jhn dienen, gehorsam sein, und alle Lieb und Trew erzeygen * W. 1529-1542, L. 1543: jnen dienen, gehorchen, lieb und werd haben</p>	<p>Pr. No. 8: 25, 10: mylan bhe teisingi laikumai = W. 1529-1542, L. 1543: lieb und werd haben</p>

7. <i>T.</i> No. 15: 26, 13: sondern jhn entschuldigen =NKP * W.1529-1542, <i>L.</i> 1543: sondern sollen jn entschuldigen(cf.Bezzenberger, KZ. 41, 115n.)	<i>Pr.</i> No. 9: 27, 13f.: schlaits turrimai stan etwinut = W. 1529-1542, <i>L.</i> 1543: sondern sollen jn entschuldigen (Bezz., KZ. 41, 115n)
8. <i>T.</i> No. 16: 26, 20: trachten =NKP * W. 1529-1542, <i>L.</i> 1543: stehn	<i>Pr.</i> No. 10: 27, 22 stallemai bhe sen ainesmu swaigstan = W. 1529-1542, <i>L.</i> 1543: stehn und mit einem Schein
9. <i>T.</i> No. 18: 26, 30: abspannen の前に nicht =NKP (vgl. Auch <i>Mag.</i> : nicht affspannen) * W. 1529-1542, <i>L.</i> 1543: sien Weib の前に nicht	<i>Pr.</i> No. 11: 27, 32: ni swaian gennan = W. 1529-1542, <i>L.</i> 1543: nicht sein Weib
10. <i>T.</i> No. 19 26, 31: bey den selben anhalten =NKP * 他のすべての版では dieselbigen anhalten	<i>Pr.</i> No. 12 27, 34: stanssubbans enlaikumai = W.1529-1542, <i>L.</i> 1543: <i>dieselbigen anhalten</i>
11. <i>T.</i> No. 20: 28, 30: Acker und Viehe * 他のテキストでの Acker, Vihe に対して, ここにだけ現れる。[対応するテキスト無し!]	<i>Pr.</i> No. 15: 29, 34: laukan, pecku =すべてのテキストにおける Acker, Vihe に同じ
12. <i>T.</i> No. 25: 30, 27: 他のテキストではすべて存在する jm diene の前の und が欠	<i>Pr.</i> No.19: 31,29: bhe stesmu schlusilai * すべてのテキストで, und jm diene
13. <i>T.</i> No. 30: 36, 22f.: er wolt uns alles * W. 1529-1542, <i>L.</i> 1543: er wolts uns alles この “es” は, 後の Gesenius, Katechismusfragen, 1631でも欠	<i>Pr.</i> No. 24: 37, 26: tans quoitilai noumans stansubban wissan = W. 1529-1542, <i>L.</i> 1543: er wolts uns alles
14. <i>T.</i> No. 34: 40, 23: ein Bad の前の und が欠。他のすべてのテキストでは存在する。	<i>Pr.</i> No. 31: 41, 25: bhe aina spigsna * すべてのテキストで, 続けて: und ein Bad

15. <i>T.</i> No.37: 42, 2f.: mit allen Sünden und bösen Lüsten = <i>L.</i> 1543 ( <i>W.</i> 1529-1539に従う) * <i>W.</i> 1540, 1542: mit allen Sünden und Lüsten	<i>Pr.</i> No. 32: 43, 3: sen wissamans grikans bhe wargan poquoitisnan * すべてのテキストで : mit allen Sünden und bösen Lüsten
16. <i>T.</i> No. 41: 44, 4と5の間に, 他のすべてのテキストで存在する so soltu zum Beichtiger sprechen が欠。	<i>Pr.</i> No. 38: 45, 4: tit turri tu preistan Klausiwingin billitwei = <i>W.</i> 1531-1542, <i>L.</i> 1543: so soltu zum Beichtiger sprechen
17. <i>T.</i> No. 44: 46, 22: eine gemeine Weise の前に, 他のすべてのテキストに存在する allein が欠。	<i>Pr.</i> No. 44: 47, 25: ter ains = <i>W.</i> 1531-1542, <i>L.</i> 1543: allein
18. <i>T.</i> No.46: 48, 14: so oft jhrs trincket これはBibel (1. Kor. 11, 25) からのもので, 小カテキズムはjrをもつ。 jrs はまた <i>Neuburg</i> 1545, <i>L.</i> 1547に見られる ; <i>Mag.</i> 1534 はgy ydtをもつ。	<i>Pr.</i> No. 45: 49, 14: so oft jhrs trincket の訳が欠
19. <i>T.</i> No. 47: 48, 19f.: durch solches Wort = <i>W.</i> 1540のみ * 他のすべてのテキストは durch solche Wort	<i>Pr.</i> No. 46: 49, 19: prastawidans wirdans = <i>W.</i> 1529-1539, 1542, <i>L.</i> 1543: durchs solche Wort
20. <i>T.</i> No. 54: 52, 28: und auff seine Güte = <i>Mag.</i> : unde up syne * <i>W.</i> 1529- 1542, 1543: und die auff seine Güte	<i>Pr.</i> No. 54: 53, 30: bhe quai no ... = <i>W.</i> 1529-1542, <i>L.</i> 1543: und die auff ...
21. <i>T.</i> No.57: 54, 13: この格言 (Spruch) は, <i>W.</i> 1539まではein Newlingで終わる。続きは <i>W.</i> 1540において最初に現れる (Tit. 1, 9による) : Der halte ob dem Wort * <i>W.</i> 1542 (Bibelとの関連で) : und halte ob dem Wort; <i>L.</i> 1543: der ob dem Worte halte	<i>Pr.</i> No. 56: 55, 16: kas nostan wirdan laiku = <i>L.</i> 1543: der ob dem Wort halte * <i>W.</i> 1542: und halte ob dem Wort <i>W.</i> 1540: der halte ob dem Wort

## 文 献

分析の実際に Trautmann が参照するカテキズムの諸版および関連する文献の一覧を、以下に再掲載しておく。ただし、Trautmann の同時代としては適切な文献であっても、今日的には代替の文献と置き換えるべきものがなくもない。代替文献は、末尾に追加文献として掲げた数点がカバーすると考えられるが、いまのところ元文献の中に確認不能のものも少なくないので、ひとまず元文献を忠実に掲載し、併記する形で「追加文献」としておいて、後に新たな参考文献を作成することとしたい。なお、Trautmann の記述中では略記（号）で文献の指示がなされているので、それも再掲載しておく（冒頭、イタリックが略記号）。

### <Trautmann, 1909の文献一覧>

*Albrecht*, Arch.: Zur bibliographie und Textkritik des Kleinen Lutherschen Katechismus von Otto Albrecht (Archiv für Reformationsgeschichte, hrsg. v. Walter Friedensburg, Berlin. Bd. 1 (1905), s. 247ff.; Bd. II (1905), s. 209ff.).

*Albrecht*, Enchir.: Der Kleine Katechismus D. Mart. Luthers nach der Ausgabe vom Jahre 1536 herausgegeben und im Zusammenhang mit den andern von Nickel Schirlentz gedruckten Ausgabe untersucht von Otto Albrecht. Halle 1905.

*Ebeling*: D. Martin Luthers kleiner Katechismus. Urtext mit Angabe der Abweichungen bis 1580 von A. Ebeling. Hannover 1890.

*Harnack*: Der Kleine Katechismus Dr. Martin Luthers in seiner Urgestalt. Kritisch untersucht und herausgegeben von Th. Harnack. Stuttgart 1856.

*Kawerau*: Luthers Werke. Volksausgabe in 8 Bänden. 2. Aufl. Bd. III. Berlin 1898 (Daselbst s. 75ff.: Der kleine Katechismus 1529; s. 121ff.: Der große Katechismus, beides hrsg. von Kawerau).

*Knoke*: D. Martin Luthers Kleiner Katechismus nach den ältesten Ausgaben in hochdeutscher, niederdeutscher und lateinischer Sprache hrsg. von Karl Knoke. Halle 1904.

*Schneider*: D. Martin Luthers kleiner Katechismus. Nach den Originalausgaben kritisch bearbeitet. Von K. F. Th. Schneider. Berlin 1853.

*F. chr.*: Das litauische Taufformular vom Jahre 1559 hrsg. von Bezzenberger (LLD II).

*H.*: Der Hamburger Katechismus 1529 abgedruckt bei Knoke.

*L.*: Die Leipziger Drucke des Valentin Babst. 1543 abgedruckt bei

*Knoke; 1544* (Kgl. Landes-bibliothek zu Stuttgart. Er enthält nur geringe Abweichungen von L. 1543, die meist orthographischer Natur sind).

*L. K.:* Der lettische Katechismus vom Jahre 1586 hrsg. von Bezzenberger (LLD II).

*Mag:* Der Magdeburger Katechismus. 1529 abgedruckt bei Knoke; Lesarten des von 1534 ib.

*Mar.:* Der Marburger Nachdruck 1529 abgedruckt bei Knoke.

*Moswid:* Moswids litauischer Katechismus vom Jahre 1547 hrsg. von Bezzenberger (LLD I).

*N. K. P.:* Catechismus oder Kinder predig; zuerst 1533 der Brandenburg-Nürnbergischer Kirchenordnung beigegeben (Albrecht, Arch. I, 259ff.); so von mir benutzt (in der Göttinger Bibliothek unter Jus statut. I. 7245); dann 1554 gedruckt durch Joh. Daubman in Königsberg (Bezzenberger, K. Zs. 41, 69f.).

*Pi.:* Die lateinische Übersetzung des Katechismus angeblich des Lonicerus. Wittenberg 1529 abgedr. Bei Knoke.

*Pr.:* Der preußische Text zitiert nach meiner demnächst erscheinenden Ausgabe der "Altpreußischen Sprachdenkmäler". I, II sind der 1. resp. 2. Katechismus, III das Enchiridion.

*S.:* Die lateinische Übersetzung des Johannes Sauromannus, Wittenberg 1529 abgedr. bei Knoke.

*T.:* Der deutsche Text s. o. u. Pr.

*W.:* Die Wittenberger Drucke des Nickel Schirlenz.

1529 abgedruckt bei Harnack;

1531 bei Schneider;

1535 bei Knoke in Katechetische Zeitschrift. Stuttgart VI (1903), s. 97ff., 162ff.;

1536 bei Albrecht, Enchir.;

1537 bei Göpfert, Wörterbuch zum kleinen Katechismus Dr. M. Luthers (Leipzig 1889);

1539 bei Harnack;

1540 bei Albrecht, Jahrbücher des Kgl. Akademie geneinnütziger Wissenschaften zu Erfurt. N.F. Heft 30 (1904), 565 ff.;

1542 bei Calinich, Dr. M. Luthers kleiner Katechismus (Leipzig 1882);

1543, von dem Albrecht, Enchir. s. 15ff., 75ff. einiges mitteilt.

*Willent:* Willents Übersetzung des Enchiridion hrsg. von Bechtel

(litauische und lettische Drucke. Bd. III).

<追加文献>

*Quellen:* Quellen zur Geshichte des kirchlichen Unterrichts in der evangekischen Kirche Deutschlands zwischen 1530 und 1600. Eingeleitet, herausgegeben und zusammenfassend dargestellt von Johann Michaen Reu. Gütersloh 1904-35.

*WA:* D. Martin Luthers Werke. 30.Band (I,II,III), Weimar 1909-10.

*BEK:* Die Bekenntnisschriften der evangelisch-lutherischen Kirche. Göttingen 1959 (4. durchgesehene Auflage)